王宮前広場に設置された国王誕生日用のステージ（2012年12月）

■フォトエッセイ■

「10月26日」の別れに備える タイ王宮前広場

写真・文　櫻田智恵
Chie Sakurada

●そびえ立つ火葬台プラ・メルマート

今やタイの一大観光地となった、王宮とエメラルド寺院。その向かいに位置する王宮前広場で、巨大な建造物の建設が進められている。その名はプラ・メルマート。上座部仏教の世界観において宇宙の中心に位置するという「須弥山」に由来する名前だ。

基部の寸法は60平方メートル、高さは17階建てのビルの高さに相当する50.49メートルに及ぶ。4段建てで、上から玉座、4基の読経台、4基のホープルアン（葬儀に使用する道具類を置いておく場所）、獅子王と象獅子（象の鼻と牙を持つ唐獅子）が据え付けられる。

この建造物こそが、昨年10月に亡くなったプーミポン前国王の葬儀の舞台となる火葬台である。タイ王室の死生観によると、王族は死後、須弥山で過ごすのだという。そのため、火葬台は死後の居場所として造られる。身分が高くなればなるほど、巨大で立派なものになるのである。

プラ・メルマートの周辺にも、葬儀で使用される多くの建物が建設されている。王宮前広場は約40ライ（6.4ヘクタール）もの面積を誇るが、広場いっぱいに建物の骨組みが立っている。

●火入れの日は「10月26日」

前国王が崩御したのは、昨年10月13日のことだった。前国王の訃報は日本でも大々的に伝えられ、また天皇皇后両陛下が弔問なさったこともあり、ご記憶の方も多いかと思う。

前国王の誕生日には、多くの人がシンボルカラーの黄色を身に着けて王宮周辺や国会議事堂周辺に集まった（2012年12月）

市場に飾られた、たくさんの前国王の写真。前国王の写真は、別名「すべての家にある写真」と呼ばれる（2013年5月）

「10月13日」は、今年からタイ政府が定める公休日となった。歴代国王でも、崩御日が公休日に指定されるのは特別なことで、他には近代化改革を成し遂げた名君、チュラロンコーン王（ラーマ5世）の例があるのみだ。

しかし、今年はそれにも増して重要な公休日が設けられる。プラ・メルマートでの火葬のための火入れが行われる「10月26日」だ。前国王の葬儀は10月25日から29日までの5日間にわたって執り行われ、その中で最大のセレモニーが火入れである。

ここで、疑問に思う人がいるかもしれない。前国王が崩御したのは2016年、つまり昨年のはずなのに、なぜ葬儀は今年2017年に執り行われるのか。しかも、崩御したその日より、火入れの日の方が重要なのはなぜ、という疑問である。

結論からいえば、葬儀そのものは前国王の崩御直後から行われており、10月25日から始まるセレモニーをもって終了する。タイでは、有力者の葬儀に数日かかることは普通である。その日数は、3日、5日、7日と様々だが、長ければ100日以上遺体が安置されることもある。たとえば、2013年に死去した第19代大僧正が荼毘に付されたのも死後100日であった。2008年に死去した前国王の姉ガラヤニーの火葬は、約11カ月後に執り行われた。身分が高くなればなるほど、火葬までの時間が長くなるのである。そして、火葬によって死者がこの世から旅立っていくという意味で、火入れのある10月26日は、タイの人々にとって重要な意味を持つのである。

弔問に訪れたところを写真に撮る人々（2017年1月）

国王崩御後、写真を持って弔問する人々（2017年1月）

建設途中のプラ・メルマート。巨大なクレーンを使って鉄骨を組み上げる（2017年5月）

●国王と国民を結ぶ王宮前広場

来る「10月26日」に、前国王と国民の最後の別れの舞台となる王宮前広場。ここは普段、民衆に開放されて憩いの場となっているが、王族に関する催しが開かれる重要な場でもあった。国王の誕生日には巨大な御真影が飾られ、行事を執り行うためのステージが設置される。前国王が最後に民衆の前に姿を現した2012年の国王誕生日にも、巨大なステージが設置され、夕方からはそこで政府主催の祝賀セレモニーが開催された。

葬儀に向けた準備中である現在、王宮前広場は立ち入り制限がかかっている。葬儀施設の建設現場は掘り起こされた土塊と石ばかりで、以前のような芝生が生い茂る憩いの場だった王宮前広場は見る影もない。巨大なプラ・メルマートの鉄骨が黒々とそびえたち、それを取り囲むように平屋の建物は日々増えている。巨大なクレーンが出入りし、多くの作業員がせわしなく働いている。通り過ぎる人はみな黒い服を身に着けた弔問客で、人々が凧揚げをしたりして楽しんだ場所とは思えず、心なしか仄暗い。

●写真は哀悼の意を示す手段？

しかし、タイの人々は、彼らなりの方法で前国王との最後の別れを迎えるだろう。タイの人々は、写真を見るのも撮るのも大好きだ。特にSNSが発達してから顕著だが、以前からその傾向があるように思う。特に、

同じく建設途中のプラ・メルマート。黒々とした鉄骨が青い空に映えている

葬儀に使用する、周辺の建物も急ピッチで建設中

前国王の写真は、持っていることそのものが前国王への親愛の情を示しているとされ、家や店に飾ったり、持ち歩いたりする人が少なからずいた。それは、前国王の崩御後も変わらず、各々お気に入りの前国王の写真を抱えて弔問の順番を待つ姿が、崩御直後から見られた。

さらには、前国王の弔問に来たことを撮影し、SNSにアップするのも流行した。その光景は、前国王の死を嘆き悲しみ途方に暮れるだけでなく、それ自体をイベント化するタイ人の強さのようなものを示しているようにも感じられる。もともと、東南アジア圏の葬式というのは、日本のそれとは様相が異なる。爆音の音楽、賑やかな葬送行列、美味しい食事…輪廻転生の価値観が息づく東南アジアでは、賑やかな葬式が、最大の弔いなのかもしれない。

今年2月に着工したプラ・メルマートとそれに付随する建物群の工事は、9月中に完成する予定だ。前国王の姉であるガラヤニー殿下の葬儀の際には、完成したプラ・メルマートが一般公開され、記念撮影をする人で賑わったという。前国王のそれも1カ月程度の間、一般公開されるのかもしれない。その時には、記念撮影をする多くのタイ人や外国人観光客が詰めかけ、再び王宮前広場は賑わうことだろう。

●王宮前広場に刻まれる新たな記憶

前国王プーミポンの葬儀は、タイでは今年一番の大イベントである。火入れの儀礼には、一般の人々も参列することができ、当日は多くのタイ人が前国王との最後の別れを惜しみに王宮前広場にやってくると予想される。

前国王崩御以降の写真を展示する展示室に並ぶ生徒たち。

葬儀が終わって喪が明ければ、プラ・メルマートは解体され、王宮前広場は再び人々の憩いの場に戻る。そして次は、現国王ラーマ10世の戴冠式が執り行われる華やかな場所になることだろう。新しい国王と国民は、この広場でどのような関係を築いていくのだろうか。

さくらだ　ちえ／京都大学　アジア・アフリカ地域研究科　特任研究員。

タイ現代王制を専門として研究を行っている。

崩御から半年以上経っても、弔問に訪れる人々が列をなしている（2017年5月）